

## 水俣病の授業実践 —差別問題に切り込む—

西 尾 理\*

### 1. はじめに—なぜ水俣病を教材化するのか—

本稿は、水俣病の原因を社会構造まで掘り下げることによって差別問題に切り込み、生徒に考えさせる授業実践を目的とする。さらに地球環境問題の単元の授業に生かせる教材となることも目指している。

#### (1) 公害学習の位置づけ

公害学習が教育課程の中に位置づけられたのは、1960年代末からのことであった。1960年代に表面化した四大公害とそれを受けての公害対策基本法（1967年）の規定を土台に中学校、高等学校で単元が設けられてきた。水俣病の問題は、その中に位置づけられてきた。

1970年代になると国連人間環境会議（1972年）や国際環境教育会議（1975年）など地球規模の国際会議の影響もあり、公害学習が環境教育に包括されていった<sup>1)</sup>。中学・高校では、公害学習を発展させて環境教育として取り扱っている<sup>2)</sup>。

しかし近年、公害学習が環境教育の陰に追いやられている現状がある。高等学校学習指導要領によると、現代社会及び政治・経済において3内容の取り扱いにおいて、それぞれ「公害の防止と環境保全」というテーマで位置づけられている<sup>3)</sup>にもかかわらず、現代社会の教科書を見ると四大公害は、環境教育の単元からは切り離されて依然として「日本経済の課題」の単元で扱われている場合が多い<sup>4)</sup>。

環境教育の陰で、これまでの公害学習の経験が放置され、現代の公害問題への関心が育てられないままになっている。

#### (2) 地球環境問題と公害学習

ところで、環境教育における地球環境問題の単元の欠点は、加害の立場を明らかにせず、「みんなが同じく加害者、みんなが同じく被害者」としてしまい、人類の課題としてまとめてしまったことである。私たちは、そうした加害の立場にあるものに、加害の行為を許してしまった私たちの社会の構造や制度に根源的な批判の眼を向け、今後のあり方を考えていかなければならない<sup>5)</sup>。そういった意味で、たとえ、地理的空間の違いはあっても構造的にみるなら、地球環境問題も公害も発生要因や必要な対応策にかかわる共通性はきわめ

て高い。ゆえに「公害の時代が終わり、地球環境問題の時代がやってきた」のではない。同根の問題なのである<sup>6)</sup>。したがって、水俣病の教材化は、日本の環境教育の原点に位置すると考えられ<sup>7)</sup>、公害問題の構造的把握が地球環境問題の深い把握に繋がると考える。

こうして責任の所在が曖昧な「人類の課題」であるとか特定の個人や団体に責任を負わせ、それを批判するだけではなく、地球環境問題の原因を社会構造にまで掘り下げて教材化することによって、たとえそれが水俣という限定されたケース・スタディであっても、地球環境問題の普遍的な課題に通じていくと考えられる。つまり、地球環境問題を扱った単元においても生徒にその社会構造まで探求することができる学びに繋がることが可能となるのではないかと考えられる。そういった意味でも今日、ケース・スタディとして水俣病を教材化する意義があると考えられるのである。

### 2. 先行実践

初めて水俣病の授業を行ったのは、熊本の中学校教師であった田中裕一であった。1968年11月20日、熊本市立竜南中学校3年7組の教室で、市教委主催の公開研究授業で行われたため、反響も大きく上からの圧力もあったという<sup>8)</sup>。教材化に際して、授業の構成をチッソの「見舞金契約書」（昭和34・12・30）とチッソ社内での猫による実験によって初めて水俣病の原因がチッソ工場の排水であることを証明したいいわゆる猫400号実験の日付の照合に絞り込み、チッソの非道に踏み込んでゆく推理を辿った。最後はチッソを動かした企業利潤追求での資本の論理と、人間の生存権をチェックする25条に帰着して、「人間の尊厳に優先するいかなる利潤追求もありえない」という結論で授業を終えた<sup>9)</sup>。

小川輝光「『高校生の社会認識形成に関する質的研究—総合学習と現地研修を活用した水俣病学習のレポート分析を事例に社会認識力を育てる—』は、水俣病を中心テーマにして、事前学習、フィールドワーク、1000字作文、レポート等の総合的な認識力を育てる実践である<sup>10)</sup>。梅野正信は、人権教育のひとつとして判決書を教材として学習することを提唱している。その一環として水俣病裁判を教材化している<sup>11)</sup>。新福

\*東京都立国分寺高等学校・埼玉学園大学

悦郎「水俣病裁判判決書を教材として資質・能力の育成を目指した人権教育の事例研究」は、梅野を受けて水俣病裁判判決書教材を使って、生徒に人権に関する資質・能力の育成を目指す実践論文である<sup>12)</sup>。小林朋宏「人権意識を高めながら、公害から生活環境を守ろうとする子どもを育成する社会科学習指導の工夫－小学校5学年「よみがえれ！水俣」の授業実践－」は、水俣病を題材として、聞き取りや手紙の交流などの活動を取り入れて、社会問題に意欲的な関心を持たせることを狙いとした実践である<sup>13)</sup>。中西仁「『働き方』について考える社会科授業」は、単にチッソの加害責任を問うのではなく、企業の組織としての風土や組織人の思考と行動をアレントの「組織の中にある人間の『無思考』」の観点から教材化したものである<sup>14)</sup>。

先行実践の特徴は、チッソの加害責任を問うもの、水俣病に苦しむ人々を扱うもの、人権教育として裁判判例の教材のひとつとして扱うもの、広く公害を問うもの、生徒の活動を題材とするものである。これらの実践の特徴は大きく分けて、チッソの加害責任を問うものと加害責任よりもむしろ被害者の立場から公害や環境問題、ESDに発展させたもの、生徒の活動の内容として水俣を扱ったものに分類できるだろう。しかし、チッソの加害責任を問う実践は、企業の社会的責任に帰してしまい、広く社会的な課題に発展していかない嫌がある。また被害者を対象にした実践や水俣を超えて広く公害や環境問題を問う実践は、加害責任を避けて最終的に人類の課題として取りまとめてしまい、責任の所在が曖昧にされてしまう。これらの課題を解消するためには、水俣病を発生させた社会構造にまで眼を向けた実践が必要なのではないかと考える。水俣病の問題をその社会構造まで踏み込んで教材化することによって、以下の点が明らかになると思われる。

- ①加害（チッソ）の明示のみならず、チッソが加害となるに至ったその社会構造まで明らかにできること。

- ②水俣病をケース・スタディとして扱い、地球環境問題と比較することによって共通の問題を明らかにすることができる。したがって水俣を学ぶことが世界の環境問題を学ぶ素地を形成することに繋がる。

- ③逆に水俣病を地球環境問題の中に位置づけて考えることが可能になる。しかも、水俣病は環境問題の原点に位置づけられると考えられる。

### 3. 教材化の焦点

上記の問題意識を教材化するに際して、次の点を焦点にした。「水俣病の原因について、早い段階からチッソの工場から流れ出た排水が疑われていたにもかかわらず、なぜ原因の特定が遅れたのか。1953年頃から兆候があり、公式に公害病認定されたのが、1968年であり、15年という長きに渡っている」。これは、田中裕一のいう絞り込み、筆者のいう焦点とほぼ同等の意味として捉えられる。田中は、水俣病の授業においてチッソの見舞金契約書（昭和34・12・30）と猫400号実験の日付の照合においたが、筆者は、原因解明の遅れにおいた。その理由は、田中の実践がそのねらいをチッソの責任と日本の経済優先政策に置いていることであるのに対して、筆者は水俣病の発生要因を水俣における差別を生み出した社会構造にしているためである。

安井俊夫は、教材研究について「その教材についてあらゆることを調べるのではなく、授業のねらいにそって、研究をすすめるものだ」という<sup>15)</sup>。そしてそのねらいを授業の中心場面に設定することの重要性について述べている<sup>16)</sup>。当然、田中と筆者では、授業の中心場面が違って来るし、そのための授業構成が変わってくる。

### 4. 授業の構成と概要<sup>17)</sup>

授業の構成は、以下の表1の通りである。1年現代

表1 授業の構成

<p>単元名 水俣病の授業実践－差別問題に取り組む－（1年現代社会 単元：四大公害裁判） 1993年、東京都立代々木高校（定時制）4時間で実施。</p> <p>【第1時】 導入 胎児性水俣病患者とその家族の写真を提示。「水俣病患者の死」の場面の描写の資料の読み。水俣病の症状の説明。小学校・中学校で習った水俣病について知っていることを書かせる作業。</p> <p>展開 (1) 水俣病の発生：水俣市の地図から水俣病が発生した地域を地図に書き込む作業をさせ、その特徴を発表。</p> <p>【第2時】 原因究明に時間がかかったことの説明を行う。(2) 水俣病の原因 (3) 漁民騒動 (4) チッソの犯罪：水俣病の原因は、チッソが流した有機水銀にあったこと。それを隠蔽していた事実。患者がチッソの社長にお詫び訪問を受けた時の文章を読ませる。</p> <p>【第3時】 チッソが水俣病の原因を隠し続けた原因を追究する。資料の読みから社会的背景を知る。(5) 水俣病は終わっていない：水俣病の差別問題に展開し、それが水俣という地域の歴史的形成過程における差別構造が水俣病の原因究明を遅らせた原因のひとつであることを究明する。</p> <p>【第4時】 まとめ水俣病の問題は、水俣という地域で起きたひとつのケースではないこと。(6) 水俣病世界へ：イラク、パキスタン、カナダでも有機水銀中毒（水俣病）が発生し、その差別構造によって、原因究明が遅れたことを理解させる。水俣のケースが世界の環境問題に繋がっていくことが見て取れる。</p>
---

社会の四大公害裁判の単元に位置づけられる。この水俣病の授業と地球環境問題の単元をセットにし、水俣病の授業を前段階として位置づけた。対象生徒は、定時制課程の1年生であり、どちらかというと勉強が苦手な生徒たちであった。水俣病のことは、小学校、中学校で習った記憶はあったので、その学習を前提としてさらに掘り下げた授業が可能になるのではないかと判断した。また様々な挫折やいじめ差別を受けてきた生徒も多くいたことから、こうした差別問題まで追求した授業でも受け止めて理解してくれるものであると考えた。

以下に、授業の概要を示す。

## 導入

これは、何だろう。

胎児性水俣病患者とその家族の写真を示す<sup>18)</sup>。「水俣病患者の死」の場面の描写の資料を読ませる<sup>19)</sup>。

水俣病にかかるとどうなるか。(水俣病の症状)

①手足が不自由になる、震える。②言葉がすらすら言えない、舌がもつれる。③耳が聞こえない。④視野狭窄という4重苦に苦しめられる。

水俣病について、知っていることを生徒に書かせる作業を行う。

## 展開

### (1) 水俣病の発生

最初の水俣病発生の資料を読ませて、以下の説明を行う。

原因は不明。栄養不足ではいけないと新鮮な魚をたくさん食べさせた。この少女だけではなかった。家族にも同じ症状が見られた。昭和29年12人発病、昭和30年14人発病、昭和31年53人発病(判明した数のみ)実は、それ以前から魚介類、鳥、猫などに異変が起きていた。漁獲量も激減していた。

水俣病の発生した場所の調査の作業を行う。

「水俣」学習案内図を見ながら水俣周辺白地図に主要な場所と地名を入れさせる。その後、以下のよう<sup>20)</sup>に問う。地図を見て、水俣病が発生した場所の特徴は何か。海に近い月浦、出月、湯堂、茂道に集中していることがわかる。ここから海の水が何らかの影響を与えていることが推理できる。

### (2) 水俣病の原因

1956年、熊本大学医学部に水俣病研究班設置。チッソ水俣工場の排水が疑われる。

根拠：研究の結果、伝染病説が否定されて、毒物による中毒で、その原因は水俣湾産の魚介類であることが突き止められた。

1959年、チッソの廃水中の有機水銀が原因ではな

いかと発表。しかしチッソは次のように反論した。「無機水銀がなぜ有機水銀になるのだ。水銀だという証拠はあるのか。」

チッソ工場の操業を停止できなかったのはなぜだろうか。

①チッソの廃水が原因だという決定的な証拠がない。②工場の操業をやめたら損失が出る。

では、行政が漁獲禁止措置をとらなかったのはなぜだろうか。

①原因物質が特定できないので漁獲禁止はできない。(食品衛生法第4条2項)②結果的に漁民が生活できなくなる。

しかし、疑わしいと思われた時点でチッソが操業を停止するか行政がしかるべき措置をとっていたら、もうこれ以上の犠牲者でなかったはずだ…。その原因は、熊本大学の有機水銀説に対して、水俣病の原因となる様々な説が出てきたためである。例えば①マンガン、セレン、タリウムなどの重金属説(厚生科学研究班)②爆薬説(日本化学工業協会大島竹治専務理事)③アミン説(東京工業大学清浦雷作教授による)。

### (3) 漁民騒動

こうして、何ら手を打たないまま患者は増え続けた。魚もどんどん捕れなくなったばかりか、水俣産の魚を恐ろしがって誰も買おうとはしなくなった。漁民の人たちの生活は追い込まれていった。漁民の人たちは、①水俣川への排水停止、②浄化装置の設置、③漁業補償を求めてチッソと交渉したがチッソが拒否。怒った漁民が工場内になだれ込み、機動隊と衝突し、漁民35人が逮捕された。

### (4) チッソの犯罪

水俣病の原因は、やはり有機水銀であった。実は、有機水銀そのものを海に流していたのである。1959年に、工場内部で動物実験を繰り返し行っていた細川博士は、工場配水によって猫を水俣病にすることに成功していたが会社は猫実験をやめさせていた。そして見舞金契約を患者側と結んだ。その契約内容はチッソが大人10万円、子ども3万円、死者30万円を支払うが、工場廃水が原因だとわかってからもこれ以上は補償しない。もし、チッソと無関係であったときは補償をただちに打ち切るというものであった。さらにチッソは、1958年9月に工場廃水を水俣川に放流した。有機水銀が川の流れに沿って不知火海に広がっていった。そのため患者の発生が拡大した。熊本大学がチッソ工場から直接、有機水銀を取り出したのが1963年であり、この時はまだチッソは水俣病の原因はチッソではないと発表している。1968年、国は、水俣病の原因がチッソ工場の

廃水に含まれている有機水銀であると発表しチッソもこれを認めた。最初の患者発生から15年の月日が流れていた。

チッソ社長が水俣病患者の家にお詫びのため来訪した場面の文章を読ませる。

「よう来てくれはりましたな。待っとりましたばい、15年間！……<sup>21)</sup>」。

資料を読んだ後、次のように問う。

チッソが自らの工場の廃水が原因だと認識し始めてからも、隠し続けその非をなかなか認めてこなかったのはなぜだろうか。

会社の利益を上げるためである。水俣病の原因となった塩化ビニールを生産するようになって、資本金4億円から52億9000万円の会社となっている。その背景には、国策とともに近代に固有の生産力ナショナリズムが潜んでいる。

以下の資料を読ませる<sup>22)</sup>。

1955年、一党支配体制を確立した自民党およびその政権は、通産省、産業界と連携して技術革新を推進した。その中心的課題は、国際的な石油メジャーの圧力の下に、化学工業全体を従来の電気化学工業から石油化学に転換する「石油化」にあった。第一期石油化政策に乗り遅れてあせったチッソは、59年10月、丸善石油と提携して千葉県五井に石油化学工業の立地を決定した。通産省は、第二期石油化学工業計画を承認する条件として、旧設備の廃棄を義務づけていたにもかかわらず、チッソ水俣工場の七期設備の新設を承認し、アセトアルデヒドの増産を促し続けた。塩化ビニールの急速な需要増と共に可塑性の原料オクタノールの増産が必要であり、しかも、アセトアルデヒドからのオクタノールの製造は、ほとんどチッソが独占していたからである。「生産力ナショナリズムの政治」が、水俣工場の稼働を続けさせ、したがって排水を停止させなかった、と言ってよい。チッソは、1962年に五井の石油化学工業の建設を終え、新方式によるオクタノールの製造が軌道に乗るのを待って、66年、はじめて海への排水を停止し、68年にアセトアルデヒドの製造設備を廃棄した。それに歩調を合わせるかのように、同年、政府は水俣病を公害病として認定した。

水俣病発生の基盤を用意したのは、「生産力ナショナリズムの政治」である。生産力ナショナリズムとは、国家や企業などのシステム全体の生産力の増大が国民を豊かにし、幸福にするという、近代に固有のイデオロギーであり、かつ政策でもある。

そして、それは地域の「生産力ナショナリズムの政治」への“服従”でもあった。

(5) 水俣病は終わっていない

チッソが謝罪して水俣病の問題は終わったのであろうか。終わっていなかった。さらなる大きな悲劇が発生していたのである。①胎児性水俣病の問題。②水俣病であるのにその事実を隠し続けた患者。③水俣病に認定されない患者。

なぜ多くの患者が水俣病だと認定されないのか。

①症状が軽いと認定されてしまう。(症状が固定されていないにもかかわらず) ②時期がずれている。③認定基準が偏っている。④申請制度が複雑で患者が申請するのをあきらめてしまう。さらに補償の問題が関わってくるので、様々な圧力がかかってくる。

圧力とは具体的にどんなことか。

チッソや国家だと答える生徒が大多数であるが、それだけではなく、水俣の住民も含まれる。補償金目当ての「ニセ患者だ」、「金の亡者だ」といわれなき中傷を受けてきた。

ではなぜ、住民からいわれなき中傷を受けるのか。

ひとつは人間のねたみ、そねみである。例えば、補償金で家を建てた患者に対して、「いいね、働かなくても生活できて」。もうひとつは水俣病に対する無知である。その苦しみも含めて、実感として理解していない。さらに水俣に潜む差別の問題である。

#### 【水俣病差別】

水俣病患者は、さまざまな差別を受けてきた。

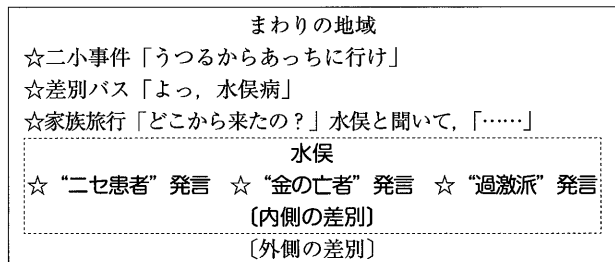


図1 水俣病差別の実態<sup>23)</sup>

外側は、患者かどうかを問わず水俣の住民が受ける差別、内側は患者が受ける差別である。患者は二重の差別を受けてきた。

差別は、どうしておこってきたのだろうか。

水俣市は、チッソという企業が大きな影響力を持った企業城下町であるということ。その遠因は、戦国時代にまで遡ることができる。

中世(深水家)——400年間——明治22年  
——水俣初代村長——現在

(陣内) 昔の城下町 上流家庭 別格視される地区	古いシステムや人脈を利用しながらチッソの城下町形成をおこなった。 *社員住宅：陣内 *工具住宅：八幡 *附属病院：社員の奥さん優先。 *農民は漁民を蔑視、定住民は漂白民を蔑視。 *蔑視されたものがさらに自分たちの下に蔑視するものをつくる。
(浜町) 商人町 古い町衆の住む地区	
(月浦) 農村	
(出月) 半農・半漁	
(丸島・船津・白浜) 魚師町	
(茂堂・湯堂) 天草もん 薩摩もん	

＝歴史的差別意識＝ ＝チッソのつくった差別意識＝<sup>23)</sup>

図2

上記のような階層構造があり、チッソはその頂点に位置している。水俣の市民は、チッソがあるからこそ自分たちの生活が成り立っていると思っている人が多い。労働者・家族の中には「俺のメシ茶わんをたたきおとすのか」、「父ちゃんのボーナスが減る」、商店主の中には「チッソをつぶすのか、水俣はヤミぞ」等。また水俣病の被害を受けてきた人たちは、多くが漁民や漂白民であり、階層構造の下位に属している人たちが多かった。社会構造的に差別されてきた人たちが多かったため、周りから支援を受けることが少なく、逆に差別されてきた。なおかつ、地域で迷信もはびこっており、水俣病を隠すよう強要する雰囲気も形づけられていた。こうしたことが、チッソの隠蔽、国策だけではなく水俣病の発見が遅れてしまい、被害を拡大した要因であった。

以上のことを整理すると、以下のような図に表わされるだろう。

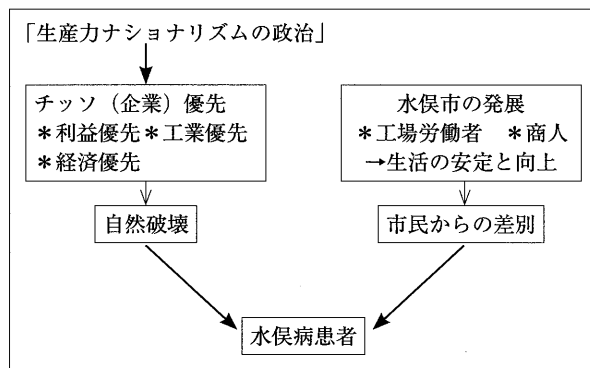


図3 水俣病の構造的要因

これは、地域の国策に沿った「豊かさ」実現への自発的「服従」とそこから生み出される差別構造の結果であった。

まとめ

#### (6) 水俣病、世界へ

水俣病は世界に広がっていった。イラク（1961

年、1971年）、パキスタン（1963年）、中国（1980年）…。カナダ（1974年）では被害者は先住民族であったが、カナダ側の最終報告は「水俣病は発生していない」というものであった。それに加えて現地の医者先の先住民族に対する態度には厳しいものがあつた。「彼らに水銀中毒（水俣病）はいない、奴らはアル中だ」、「アル中の調査をした方がいい」。

これは、日本の状況と同様に被害者はその病を背負うことに加えて差別の苦痛を重ねることになる<sup>24)</sup>。またここでは、上記で示した水俣病の事例が世界の環境問題に当てはまっていくことが見て取れる。

#### 5. 生徒の感想

この授業を行ったのは、約20年前のことである。その後、さまざまな修正を加えながら現在に至っている。ここでは、代々木高校（定時制）の生徒の感想文（1993年）から典型的なものをピックアップし、この実践を評価してみたい

こういう公害が一番おきてほしくありません。それも有機水銀じゃない、無機水銀だなんて言っておいて結局やっぱり有機水銀を流していたじゃないですか？自分たちの非も認められない工場なんて市の発展も何もないですよ。こんな罪もない人々が次々に病気になって、おまけにみんなから差別されて、金の亡者扱いにされて本当にかわいそうです。行政も早くこの事に気づいて認めてくれれば良かったのに…。あの資料を読んでジーンとききました。チッソの関係者が患者の家をまわった時、「待ってました、15年間」っていう女の。 「15年間何言おうか考えてたのに何も言えなかった」っていったあの。もうこんな事は二度と起きてほしくなく、今なお苦しんでいる患者の方々には頑張ってくださいといたいんです。

加害企業であるチッソへの批判である。それもかなり厳しいものである。この実践の目的は、チッソの加害責任だけではなく、どうしても加害責任の方に生徒の眼が向いてしまっている。

私は子供の頃、テレビで水俣病の事を知り、自分もなるのではと心配でした。そして水俣病に苦しむ女の子ががんばって生きているのを見て、私はなぜか気持ち悪いと思ったり、手足が曲がっているのを笑ってました。そして母におこられました。でも授業で勉強してみて、大変な出来事であり、何とかしなくてはと思った。そして子供の頃、笑っていたことを反省しながら授業を聞きました。そしてまだたくさんいる水俣病患者に大きな声でがんばれ！とみんなで言おうと思った。

私がはじめて水俣病を知ったのは、小学校の頃です。小学校の社会科の時間に水俣病のことをはじめイタイタイ病や四日市ぜんそくなど工場からの被害で病気になるものがいっぱいあることを知りました。私たち人間にとって、確かに何かを作る工場（自分たち人間に必要な物）は大切な役割をもっていると思います。でもやっぱり人間を死なせてまで……つくるのは、と思います。小さい頃（小学生）始めて知った時は、はじめはイヤだな、かわいそうだな、自分はなりたくないなって、こわいって気持ちがありました。中学の頃はだんだんと原因や工場のことをいろいろと知りました。この時は、工場の人たちはなんてやつらなんだって思いました。高校に入って学んだことは、小学～中学の時わかんなかったこととか全部わかりました。自分のことしか考えられなかった人たち。もし自分がかかったらって考えなかった人たち。ばいきん扱いする人たち。人間なんて自分のことしか考えられないもんなんだって。私はそんな人間にはなりたくないとの授業で思いました。

小学校から学んできて、今回の授業で理解が深まっていった感想文である。そして表面的に知ったならば、どうしても偏見を持ってしまう傾向にあるが、理解が深まることによって偏見が解消されるとともに共感を持ちつつあることが見て取れる。

私も水俣にこの頃住んでいたら、口では悪く言われなくてもどこかで水俣病の人達を差別していたかも知れない。うつらないとわかっていてもやっぱり何となく差別してしまう。水俣病にかかった人々はほんとに苦しかったかもしれないけど、まわりの人々もすごくひしひしだったと思う。こういう時に力のある人が正しい結論を出してみんなをまとめることができれば差別はおこらないと思う。（よくわからないけど…）

この感想文は、単純に差別はいけないと書いているのではなく、加害者の立場にいたら、自分も差別をされたいと述べて、どうまとめたらよいか迷っている感想文である。社会構造的な視点を学ぶことによって傍観者となってチッソや水俣の市民を非難するのではなく、自らが同じ立場に立ったらどうであったかということ自らに問うている。

今回水俣病について色々な事を知った。一番私もしようだった時にイヤだったなって思った事+一番印象にある事は、水俣病が家族に一人でもいると周りの態度が180度変わってしまっ、生活が全然変わってしまうという事。確かに、その水俣病がうつってしまうというウワサなんかがあったら、きっと恐れてしまうかもしれないが、でもやっぱり人間にとって一番差別なんかイヤだと思う。今も、水俣病と闘っている人がいるし、それに水俣病の人達の方がもしかしたら、普通に生きてる人間なんかよりもずっとがんばって生きてる様な気がする。そう思ったのは自分も何を目標として、そして何をやりたいのかもわからないで、ただ何となく生きてる人間だから…。でも今水俣病の原因となった工場の事も、全て裁判によって認められた事、あんまりうまく書けないけどよかったと思う。

この感想文は、水俣病の患者をただ「かわいそう」だとか「大変だ」とかのマイナス面だけで見るのではなく、積極的な生き方の部分を感じて、自らの生き方と比較して自分に問うている。

僕は、とてもこわい病気だと思います。自分は、本当にめがまれた人間だと思います。自分勝手かもしれないけど、水俣に生まれなくてよかった。そして、水俣病にかかった人はかわいそうだなと。水俣病ではなくて水俣病に住んでいる人がいるとすれば、水俣病と軽蔑する人がいると思います。でもみな、なりたくてなったわけではない。水俣病になってしまった人だって、今も一生懸命に生きている。そんな強い心を持った人を、僕は見習いたいと思います。そして、人は誰でも欠点があると思います。でもそのことを言って、いじめたり、軽蔑したり、そんな事をしないで、同じ人間としてがんばっている。僕はそんな人達を見習っていきたいと思います。

この生徒は、弱い者いじめを行っていた現場を見て注意して、筆者と揉めた生徒の感想文である。この後、この生徒は変わり、いじめた生徒を逆に庇うようになっていった。

これらの感想文から言えることは、水俣病の問題をその社会構造まで掘り下げて教材化した結果、単にチッソの加害責任を非難するといった表層的な感想文だけではなく、加害者の視点に自らを置いたり、差別への嫌悪感をほんとうの意味で実感したり、患者の生き方に共感したり、また自らの差別意識を変えて行動で示した生徒などが見て取れた。

以上が、授業の構成と生徒の感想である。感想文の中には、依然としてチッソを批判するものも見受けられたが、その社会的背景にある差別構造に眼を向け差別されてきた水俣病患者の生き方を積極的に評価したり、自らの差別意識に問いかけ自身を変えていこうとする姿勢の生徒もみられたことが明らかになった。そして次の地球環境問題に繋がる学びの素地は準備されたと考えられる。ただ、本稿が水俣病の授業実践が中心であったため、まとめ（6）で外国の水俣病に若干触れたに過ぎなかった。そのため感想文からは地球環境問題の単元に同様の社会構造を生徒が探求しえるのかということまでは検証に至らなかった。今後の課題としては、この単元の後に地球環境問題行っている上記の検証と別個独立した外国の環境問題をケース・スタディとして水俣と比較する教材が必要となるであろう。

## 6. 今後の課題—ミナマタからフクシマへ—

本実践を行ったのは、ほぼ20年前のことである。20年前の実践をまとめた最大の理由は、水俣病を発生させた社会構造が、福島原子力発電所の事故と通じるところがあること考えたからである。開沼博は、原

子力を三つに捉える。第一に、「戦後成長の基盤」としての原子力。第二に、「地方の統制装置」としての原子力。第三に、「幻想のメディア」としての原子力である<sup>25)</sup>。日本の戦後成長における地方の自動的かつ自発的な服従の歴史が存在する<sup>26)</sup>。それを可能にしたのは、原子力がムラにやってきて、わらぶき屋根が瓦屋根へ変わったこと。そして、原子力とのファーストコンタクトは「雇用」であった<sup>27)</sup>。

この社会構造は、水俣と通じるものがある。そして水俣と同様、原子力も「生産力ナショナリズムの政治」であった。さらにそれを享受してきたのは、東京を中心とする都市であった。こうした構造は、水俣病は発生した状況と変わらない。水俣病における教訓が生かされてきたのだろうかという疑問が本実践をまと

めた動機のひとつであった<sup>28)</sup>。

この構造は、後期の産業社会が抱えるひとつのシステムである。このシステムでは「リスクの分配をめぐる争い」が主要な政治的対立となり、リスクの起因者とリスクを被る者が一致しないということが起こる。そのため、技術による利益の受益者とリスクの負担者（少数民族、過疎地、労働者）の間に不均等が生じる「環境正義」の問題として捉えられる<sup>29)</sup>。また、原発は平時の時でも被曝に晒された下請け労働者を必要とする。ある格差を利用して、一部の人の圧倒的な犠牲の上でなければ成り立たないシステムを私たちは容認し続けるのかという人間の安全保障の問題としても捉えられる<sup>30)</sup>。今後はこうした捉え方からミナマタからフクシマへ通じる教材化が課題となる。

## 註

- 1) 水山光春「公害と環境学習」(日本社会科教育学会編『社会科教育事典』ぎょうせい, 2000年), p.203.
- 2) 西村公孝「公害学習」(森分孝治, 片上宗二編『社会科重要用語の基礎知識』明示図書, 2000年) p.241.)
- 3) 文部科学省『高等学校学習指導要領』(平成21年3月), p.49, p.52.
- 4) 例えば、筆者が所属校で使用している『高等学校現代社会』(第一学習社, 2013年)も地球環境問題の単元ではなく、戦後日本経済の課題で扱われている。
- 5) 高田研, 林美帆, 五十嵐有美子, 井上有一「公害教育－環境教育の原点から未来をつむぐ」(井上有一・今村光章編『環境教育学 社会的公正と存在の豊かさを求めて』(法律文化社, 2012年) p.34.
- 6) 同上, p.35.
- 7) 同上, p.38.
- 8) 和井田清司『戦後日本の教育実践 リーディングス・田中裕一』(学文社, 2010年) p.122, 241.
- 9) 田中裕一「教育実践の可能性」(和井田清司『戦後日本の教育実践 リーディングス・田中裕一』学文社, 2010年), p.121.
- 10) 『社会科教育研究』NO.121, 2014年。
- 11) 梅野正信『裁判判決で学ぶ日本の人権 中学校授業づくりのための判決書教材資料』(明石書店, 2006年) pp.116-209.
- 12) 『教育実践学研究』(第13巻 第1・2合併号 2012年)
- 13) 上越教育大学学校教育総合研究センター『教育実践研究』(第21集, 2011年)。
- 14) 『立命館大学産業社会論集』2011年12月。
- 15) 安井俊夫『発言をひきだす社会科の授業(中学校)』(日本書籍, 1986年) p.25.
- 16) 同上, p.38.
- 17) この授業構成において、次の文献、資料を参考とした。原田正純『水俣病』(岩波新書, 1972年), 同『水俣病は終わっていない』(岩波新書, 1985年), 原田正純『水俣病に学ぶ旅 水俣病の前に水俣病はなかった』(日本評論社, 1985年), 石牟礼道子『苦海浄土 わが水俣病』(講談社, 1972年), 石牟礼道子『天の魚 続苦海浄土』(講談社, 1980年), 宇井純『公害の政治学 水俣病を追って』(三省堂, 1968年), 桑原史成『水俣 終わりなき30年－原点から転生へ』(径書房, 1986年), 色川大吉『水俣－その差別の風土と歴史』(不知火海一調査団の証言パンフレット, 1980年), 清浦雷作『改定新版 公害への挑戦 一億人をむしばむ文明のガン』(講談社, 1971年), 栗原彬編『証言 水俣病』(岩波新書, 2000年), 栗原彬『「存在の現れ」の政治 水俣病という思想』(以文社, 2005年), 高峰武編『水俣病小史 増補版』(熊本日日新聞社, 2008年), NHK取材班「チッソ・水俣 工場技術者たちの告白」(『NHKスペシャル 戦後50年その時日本は第3巻』(NHK出版, 1995年)
- 18) 桑原史成『水俣 終わりなき30年－原点から転生へ』(径書房, 1986年)
- 19) 石牟礼道子『苦海浄土 わが水俣病』(講談社, 1972年) pp.296-298.
- 20) 水俣芦北公害研究サークル『水俣病・授業実践のために 学習・資料編』
- 21) 石牟礼道子, 前掲, 苦海浄土, pp.296-298.
- 22) 栗原彬『「存在の現れ」の政治 水俣病という思想』(以文社, 2005年) pp.92-93.
- 23) 水俣芦北公害研究サークル『水俣病・授業実践の

ために学習・資料編』より筆者作成。

- 24) 原田正純『水俣病は終わっていない』（岩波新書, 1985年）pp.171~193.
- 25) 開沼博『フクシマ論 原子ムラはなぜ生まれたのか』（青土社, 2011年）p.52.
- 26) 同上, p.69.
- 27) 同上, pp.271~274.
- 28) そういった意味で, 本実践は20年前の実践であり, 学習指導要領も生徒の実態も変化しているにもかかわらず, 依然として意義のあるものではないかと考えている。
- 29) 直江清隆「原発事故と技術の哲学」（『都倫研紀要』第51集, 2013年）pp.67~68.
- 30) 長有紀枝『入門 人間の安全保障 恐怖と欠乏からの自由を求めて』（中公新書, 2012年）pp.243~244.